

「西安文廟碑林関係元朝碑」はしがき

森田憲司

陝西省西安の碑林に残された石刻の拓影を網羅して出版した『西安碑林全集』（広東経済出版社 1999、以下『全集』と呼ぶ）が、大部のものであるにもかかわらず、我々（以下、本科学研究費の構成員や研究協力者、さらに研究集会参加の人々を指す）の共同研究の複数メンバーの勤務先に配架されるようになった。この全集には、古くは始皇刻石から、新しくは民国のものまで3千余の石刻が収められており、「開成石経」がかなりの比重を占めるとはいうものの、なんとといっても北朝から唐代にかけての石刻の質的、量的な充実は、圧巻であろう。事実、こうした視点からの本書の紹介は、すでにいくつかなされている。

その一方で、我々は本書を元朝石刻の史料集と考えている。本書中で我々の確認した元朝石刻は60件、唐代のものに比べれば、数としてはあまりにも少ない。しかし、そこにも少なからざる史料価値がある。そのポイントは次の点であろう。

- 1 少なくとも碑林所在の石刻については、新資料のものを含めて、「新しい」拓本を得ることになった。
- 2 碑林所在の史料のみならず、西安各地の石刻を「陝西碑石菁華」の項目を設けて収録しており、元朝に関してはとくに全真教関係で有用である。
- 3 すべてに全拓を掲載し、その多くには碑陰や碑側の拓影も含む。

もちろん、問題がないわけではない。全体的な感想として言えば、印刷の鮮明さという点では、京都大学人文科学研究所の石刻データベースは言うに及ばず、『北京図書館蔵中国歴代石刻史料匯編』や『陝西石刻精華』などに比して見劣りがするし、「陝西碑石菁華」においては、他本からの転写と思われるものもあり、さらに不鮮明である。しかも、大石の多い元朝石刻であるから、全拓では文字が読みづらくなるのに、部分拓は、まさに「部分」とどまっていて、年次や人名にかかわるような石刻学的に必要な部分が載せられているとはかぎらない。各箇所が選ばれた理由はわからず、「鑑賞」の材料でしかない。

このような問題点があるにもかかわらず、我々が『全集』所収の文献が持つ史料価値を評価し、共同研究をおこなうこととした。その理由としては、著名な資料群としての碑林の存在意義とともに、さらなる背景として、西安や陝西一帯が元朝史に持つ意義をもあげる必要がある。すなわち、この地域が、モンゴル帝国時代には安西王府という独立的な政権の支配下となり、中央政界の動向に少なくない関わりを持っていたことである。

このようにして我々は元朝史料としての『全集』利用を目指して活動をはじめたわけであるが、こうした、元朝石刻としての本全集所収史料の価値とその利用については、本誌19号所載の論考がその具体的な利用の例なので、参照していただきたい。また、奈良大学図書館では本書を紹介する展示を企画して、その解説を本誌の別刊として刊行したし、今号には、『全集』所載の元朝石刻目録を掲げた。

そして、本号においては、従来の本誌とは形式を異にして、『全集』に所収されたモンゴル支配下の文廟・碑林関係石刻の録文を特集した。それは、碑林の成立とその展開についての基本史料である西安文廟関係石刻をまず手がけたということとともに、我々の石刻に対する方法論的な考え方にも由来する。

すなわち、ここに納めた石刻の多くについては、すでに『金石萃編未刻稿』や『陝西金

石志』などに録文が収録され、それが利用できる。つまり、とりあえず「読む」という範囲に限るなら、文廟関係に限らず、『全集』所収の拓影の多くは、「新史料」というわけではない。しかし、民国、あるいはそれ以前の学者が書物の中に提示する録文をただ読むだけではなく、拓本、あるいは石そのものから石刻を読みなおそうとすることは、新史料の紹介に匹敵すると、我々は考えてきた。というのも、経験的に述べれば、文献に既載の石刻録文のほとんどには、個々の文字について、間違い、あるいはそこまで言わぬまでも疑問の存在しないものはないからである。

そして、原石に即して石刻を読もうというものが必ず経験することだが、同じ石刻について、拓本が複数あれば複数の読みが成立し、個々の文字の読み取りについてより正確を期することができるのであるから、すでに拓本が紹介されている石刻であっても、新たな拓影の紹介は新たな読みを進めるものなのである。

くりかえすが、我々は石刻史料を利用するにあたっては、他人の「読んだ」ものではなく、自分が「読んだ」ものを第一とすることを、一つの原則としている。今回の特集に掲載されている録文は、我々の研究会において共同で読んだものをベースに、それぞれの担当者が文字化したものであり、こうした我々の考え方の実践といえるものなのである。

もう一つ、森田がかねがね述べているように、石刻の目録記述の標準化が進んでいないのと同様に、石刻録文の形式についても、形式、諸記号などについての標準もない。これについての試行錯誤の上で以下のような基準を作成してみた。ご参照いただきたい。

[凡例]

まず、ここで対象とした石刻を記す。次掲の表では欄外に*のマークを付した。

大元国京兆府重修宣聖廟記 至元13年9月（『西安碑林史』による）

府学公拋及重立文廟諸碑記

※同じ石の上下にこの2つは刻されており、「公拋碑」は至元13年12月13日、「諸碑記」は至元14年正月望日の日付を有する。ここでは、別の石刻として扱った。

陝西学校儒生頌徳之碑并序 至元14年正月望日

※『全集』は「安西王盛徳碑」と題する。

文廟積奠記 至元16年正月上澣

贍学田記碑 後至元6年正月15日（『全集』は前至元に誤る）

奉元路重修廟学記 至正6年10月望日

※この石刻は『全集』には所収されておらず（現存しない？）、この時点では閲覧に問題のなかった北京国家図書館の「中国石刻菁華」から森田が作製してあった録文を、「碑林史」と校定したもの。

重修宣聖廟記 至正24年（下欠）

※この碑題は『全集』の命名によるもの。

大元国京兆府重修宣聖廟記 至正26年3月吉日

※『全集』の図版は、至元13年碑を誤って掲載している。

そして、この録文は次のような方針で作られている。

1 各録文は、原則として『全集』の録影からの読み取りと、校定本文からなる。

録文とは、全集の拓影から我々が読み取れるものを文字化したものであり、原石の

改行などについても、可能な範囲で忠実に再現している。また、各録文の責任者名を最後に付している。

校定文は、改行を「し」で示しつつ、ベタ打ちで作成し、他の文献との校異を示したものの。

- 2 校定については、それぞれに用いた書物を参照した。
- 3 文字は常用漢字を用いる、ただし常用漢字では判別しがたい漢字、常用漢字にはない漢字については、正字を用いた。石刻にしばしば見られる異体字は採用していない。
- 4 本誌の作成計画段階では、並行してこれらの石刻を掲載する、『金石萃編未刻稿』や『陝西金石志』を参考資料として影印する予定であったが、頁数の関係で省略することとした。当然のことながら文字に異同があるので、『石刻史料新編』などによって各自でご参照いただきたい。
- 5 録文校定本文の作成にあたって、次のような記号を用いている。
 - : 拓影のかすれにより判読できない文字
 - // : おそらく原石が摩耗しており判読できない文字
 - アミ : 残存字形から推測される文字
 - 北 : 『北京図書館蔵中国歴代石刻史料匯編』(中州古籍出版社 1990) 48～50 冊
 - 西 : 路遠『西安碑林史』(西安出版社 1998)

全集所載元朝拓影目録について

また、参考資料として『全集』所載の元朝拓影の目録を、次に掲げる。石刻の成立年代の順によって並べ、形式は、森田が『奈良大学総合研究所報』に連載している「可観元代拓影目録」の体裁を踏襲しているが、若干の変更がある。各項目の内容は次のとおり。

碑名 原則として碑にあるタイトルを採用した

典拠 碑名の所在をしめす

年代 その石刻の作成された年代をしめす

根拠 年代判定の根拠をしめす

所在 その石刻の所在をしめすが、全集の記述による

碑林全集 『全集』での掲載箇所(該当石刻の記事の開始箇所)

その他 『全集』以外の拓影掲載文献を示す。その書名略号については、森田所報論文に従ったが、本書に関係するものはつぎのとおり

于右任 西北民族大学図書館于右任旧蔵金石拓片精選 上海古籍出版社 2008

図版番号

新出陝西2 新中国出土墓誌陝西2 文物出版社 2003 図版番号

西北 中国西北地区歴代石刻匯編 天津古籍出版社 2000 冊・頁

陝西 陝西碑石精華 三秦出版社 2006 図版番号

重陽 重陽宮道教碑石 三秦出版社(陝西金石文献匯集) 1998 図版頁

道家 道家金石略 文物出版社 1988 頁

北図 北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編 中州古籍出版社 1989-91 冊・頁

羅蔡 八思巴字与元代漢語(増訂版) 中国社会科学出版社 2004 図版番号

楼観 楼観台道教碑石 三秦出版社(陝西金石文献匯集) 1998 図版頁

菁華 中国国家図書館石刻データベース、本稿執筆時点では画像閲覧できなくなった

碑名	典拠	日付	根拠	所在	碑林全集	他の文献	注記
重陽成道宮記	首題	甲寅(憲宗4)3月	記	周至	194・0744	北図48・018、西北07・127、 陝西205、重陽7	「北図」「西北」は額を取り違え。「重陽」は碑陰額なし
龍錫親玉真清妙真人(幹勤守堅)本行記	首題	中統2年清明	立石	碑林	029・2946	北図48・027、西北07・130、 道家541	
終南山重陽万寿宮碧虛楊真人(楊明真)碑	額	中統3年11月18日	立石	戸県	194・0747	北図48・029、西北07・132、 陝西208、重陽11	「北図」は首題剥落
大元重修古楼觀宗聖宮記	首題	中統4年3月12日	建	周至	194・0751	陝西209、楼觀13(陽)、15 (陰)	元貞丙申(2/1296)重九重刻、碑陰：同塵真人門下宮觀欄首名氏
玄門掌教清和妙道広化真人尹宗師(志平)碑銘并序	首題	至元元年10月23日	建	戸県	194・0755	北図48・037、西北07・133、 陝西211、重陽12	額欠、「北図」「西北」は12月23日に誤る
大朝故京兆総管府奏差堤領経歴段君(繼宗)墓誌銘并序	首題	至元3年正月12日	立石	碑林	095・4723	新出陝西2・338	蓋あり、1956年曲江池出土
元故鼎公和尚(任崇鼎)之塔銘	横題	至元8年4月1日	銘	碑林	095・4738	新出陝西2・339	1956年南城門洞出土
玄門嗣法掌教宗師誠明真人(張志敬)道行碑銘并序	首題	至元9年9月9日	立石	戸県	194・0758	北図48・053、于右任160、西 北07・134、陝西236、重陽13	「重陽」は額なし
周舍人妻耶律氏墓誌	森田	至元10年7月17日	葬	碑林	095・4744		出土地不明
筠溪道院記	首題	至元11年2月15日	立石	周至	194・0762	北図48・057、西北07・136	
終南山神仙重陽子王真人(王詣)全真教祖碑	首題	至元12年7月15日	立石	戸県	194・0766	北図48・065、西北07・138、 陝西214、重陽14	「碑林」のみ額を掲載、「西北」は「王詣」に誤
大元国京兆府重修宣聖廟記	首題	至元13年9月	立石	碑林	029・2961	北図48・070、西北07・140	*
府学公昶及重立文廟諸碑記	全集	至元14年正月15日	立石	碑林	030・2969	北図48・072、西北07・141	上載の公昶は至元13年12月13日安西王令旨
陝西学校儒生頌徳之碑并序	首題	至元14年10月15日	日付	碑林	030・2980	北図48・074、西北07・142	*
円明真人高公(道寛)碑銘	額	至元15年5月重午	建(拋録文)	戸県	194・0770	重陽17	首題欠落。「重陽」の復元では「提点陝西四川道教兼領重陽万寿宮事洞觀普濟円明真人高公道行碑并序」
文廟釈奠記	首題	至元16年正月上癸	建	碑林	030・2987		*
大元故奉議大夫耀州知州馮公(時泰)墓誌銘	首題	至元17年2月24日	附	碑林	095・4748	新出陝西2・341	1960年長安県草曲出土
元輔昌墓誌	新出	至元17年	葬	碑林	095・4746	新出陝西2・340	至元庚辰卒、1956年南郊野狐塚出土
終南山大重陽万寿宮真元会題名記	首題	至元18年8月15日	記	戸県	194・0774	重陽22	辛巳中秋日
周公廟潤徳泉復涌記	首題	至元19年4月27日	欠落	岐山	194・0780		

岐山周公廟潤德泉復出記	首題	至元19年8月19日	記	岐山	194・0784		
終南山宗聖宮主石公(志堅)道行記	首題	至元19年8月	不明	周至	194・0777	北図48・084、楼観20	日付部分欠落、「北図」は8月15日とい う
全真第二代丹陽抱一無為真人馬宗師 (從義)道行碑	首題	至元20年5月5日	立石	戸県	194・0787	北図48・087、西北07・145、 陝西217、重陽23・24	
女冠澄心散人(常守久)墓誌	首題	至元24年	建	碑林	095・4767	新出陝西2・342	月日部分欠落、1955年劉漢基捐
玄門弘教白雲真人慕公(志遠)本行碑	首題	至元25年8月15日	日付	戸県	194・0791	北図48・108、陝西218、重陽26	
姜從善買地券	全集	至元28年2月28日	文中	碑林 ?	095・4773		首題「墓致券碑」
楼観先師伝碑	題額	至元30年8月	日付	周至	194・0795	北図48・125、西北07・150、楼観 29	
古楼観繁牛柏記	首題	元貞元年4月	立石	周至	194・0803	北図48・141、西北07・151、楼観 30	
大元清和妙道広化真人尹宗師(志平)道 行之碑	首題	元貞元年8月15日	立石	周至	194・0799	北図48・144、西北07・153、楼観 31	「北図」、「西北」首題不完全
大元故京兆路知府劉侯(尚)神道碑并 序	首題	元貞2年10?月7日	日付	碑林	030・2995		拓影不鮮明
大元故覃機張夢臣(輔臣)壙記	蓋	大徳2年2月27日	葬	碑林	095・4777	新出陝西2・344	西安近郊出土
大元重建会靈觀記	首題	大徳4年閏8月15日	立石	周至	194・0807	北図48・160、西北07・155、楼観 33	下欠、青華不鮮明
大元重刊上清太平宮碑之記	首題	大徳6年2月16日	記	周至	194・0810	青華	上載重刊記、下截端拱元年7月9日原刻
終南山古楼観大宗聖宮重建文始殿記 (陽)	首題	大徳7年9月15日	記	周至	194・0813	北図48・168(陽)、169(陰)、 170(額)、西北07・157(陽)、 158(陰)、陝西222、楼観34	
玄明文靖天樂真人李公(道謙)道行銘并 序	首題	大徳10年5月	建	戸県	194・0817	北図48・184(篆額)、185(碑身)、 西北07・159(篆額)、160(碑身)、 陝西224、重陽33	
全真開教秘語之碑(陽)	首題	大徳10年10月15日	重建	戸県	194・0821	于右仁161(碑陰あり)、陝西226、 重陽31、青華	于右仁所載碑陰の日付(大徳10年下元)に よる
玉陽体玄広度真人王宗師(処一)道行 碑	首題	大徳11年10月	道家	周至	194・0825		拓影不鮮明なため「道家」を参照
楼観大宗聖宮重修說経台記	首題	皇慶元年8月7日	立石	周至	194・0828	北図49・024(陽)、025(右)、西北 08・001(陽)、002(右)、楼観36 (陽)、37(陰)、38(左右)	立石の日付は左側による。
加封孔子聖旨并記	森田	皇慶2年5月13日	跋	碑林	095・4781	北図49・029、西北08・003	上載聖旨(大徳11年7月19日)、下載記(皇 慶2年5月13日)
華藏莊嚴世界海図	家額	皇慶2年7月16日	建	碑林	102・0118	人文082X、青華	

大元勅藏御服之碑	首題	延祐2年3月3日	立石	戸県	194・0834	人文095X、096X(額なし)、陝西227、重陽36、菁華	人文95Xは、後代に作られたもの？
元故輔君(昌)墓誌銘并叙	首題	延祐3年4月1日	合葬	周至	095・4759	新出陝西2・345	1956年南郊野狐塚出土
皇元褒封全真五祖七真勅辞	篆額	延祐4年3月3日	立石	戸県	194・0842	陝西228、重陽38、菁華	1載2載は至大3年2月聖旨
有元故茶局提举郭君(宗敏)誌銘	首題	延祐5年8月14日	合葬	碑林	095・4781	新出陝西2・346	西安南郊瑞禾村出土
大開元寺興教	首題	延祐6年正月	立石	碑林	102・0122	北図49・070、西北08・005	本来、次と上下的なもの、「碑林」はこちらを「玄宗間法図」と命名
大開元寺興致碑	森田	延祐6年正月	立石	碑林	030・3003		
大元奉元路終南山増修通仙万寿宮碑	首題	延祐6年10月15日	日付	周至	194・0846		
玄通弘教披雲真人(宋徳方)道行之碑	首題	延祐7年5月2日	日付	戸県	194・0850(陽)	北図49・081(陽)、082(陰)、西北08・006(陽)、007(陰)、陝西229、重陽43(陽)、44(陰)	碑陰:披雲真人門下法派名氏之図(額)
大元故安西路耀州尹耶律君(世昌)墓誌銘	首題	泰定3年6月1日	附	碑林	095・4789	新出陝西2・347	1950年長安県韋曲出土
皇元孫真人(徳彙)道行碑	篆額	元統3年9月	建	戸県	194・0854	陝西230	
瞻学田記碑	首題	至元6年正月15日	立石	碑林	029・2956		『全集』は前至元6年とするが、後至元6年の誤り、正月嘉平良日
奉元路円通観音寺記	首題	至正11年2月甲寅	立石	碑林	030・3007		2月に甲寅なし、3月か？
牛山土主忠惠王廟碑	全集	至正14年		碑林	030・3010		
帥正堂漫成	首題	至正17年10月	鐫	碑林	030・3014	北図50・114、西北08・023	詩、本文末に至正丁酉夏とあり、最後に十月初吉鐫とある
石溪和尚(義瓊)道行碑銘	篆額	至正22年	立石	碑林	030・3017		首題:大元(12字欠)和尚瓊公道行碑
勅封揚徳崇聖旨碑	森田	至正23年7月21日	文書	戸県	194・0862	人文245X(10月23日とする)、北図50・128、西北08・026、羅蔡(上)51	額:宸旨王命、上截至正23年7月聖旨漢八、下截至正23年兔兎年7月21日聖旨漢文、羅蔡は上部のみ
重修宣聖廟記	全集	至正24年	立石	碑林	030・3020	菁華	日付部分見えず
大元国京兆府重修宣聖廟記	首題	至正26年	録文参照	碑林	030・3023	北図50・135(陽)、136(陰)、西北08・027(陽)、28(陰)、菁華	碑林全集は至元13年碑と図版を間違えていいる、録文集参照
松雪翁修竹賦	首題	元代		碑林	030・3026		法帖、趙孟頫書
万寿宮建築残図	全集	元代		碑林	102・0125	重陽39	